

和歌山大学陸上グラウンドの緑化事業

プロジェクトメンバー

木村祐太, 教育, 学年, 3年
川口良介, 教育, 2年 梶本豪幸, 経済, 3年

今年度の活動目標

1. 1年を通しての陸上グラウンドフィールド部分の芝生化
2. ポット苗作成、移植作業、水撒き・追肥等の維持管理体制の確立

1. 目的と目標

グラウンドとは本来、人がスポーツや遊びを行う場所である。しかし、日本のグラウンドは固い土で覆われ、転ぶと怪我をしてしまい、思いっきり体を動かすことができない。しかし、グラウンドを芝生化することで表面はクッション性のある芝生で覆われ、転んで怪我をすることもない。裸足でさえも思いっきり走り回り体を動かすことができる。NPO 法人グリーンスポーツ鳥取代表者ニール・スミスは土のグラウンドを日本の砂漠とまで言って、グラウンドの芝生化を推奨している[1]。また文部科学省もグラウンドの芝生化は教育、環境保全、地域スポーツ活動の活性化に効果があるとして校庭や市民グラウンドの芝生化を推進するために、2008年度予算概算要求に1億1000万円を計上した[2]。そこで私たち和歌山大学体育会プロジェクトチームは陸上グラウンドの芝生化を行い、多くの人に芝生のグラウンドを使用してもらい、芝生で運動ができる素晴らしさを感じてもらいたいと考えている。そして、日本に馴染みのない芝生文化を和歌山県だけでなく全国に発信することを目的としている。

今年度の目標は1年を通しての陸上グラウンドの全面芝生化である。7月に芝生をグラウンドに移植し、7・8月の養生期間後は図1のようにグラウンド全面が芝生に覆われている状態であった。しかし9月からグラウンドを使用し始めると図2のようにグラウンド中心の芝生がはげ始めてきている。これ以上芝生がはげること防ぐためグラウンドの使用後は水撒きや土入れなどメンテナンスを行っている。そして、グラウンド全面が芝生で覆われた状態を維持し続けることを目指している。



2. 活動

陸上グラウンドのフィールド部分を活動の拠点としているサッカー部(男女)、ラグビー部、陸上競技部を中心に、体育会に所属するクラブ部員全員の協力で、「時間と労力」をかけて取り組んだ活動は、以下の通りである。

今年度の活動

1. 切り芝到着 (H21.5.1)



グラウンドに移植する芝、バーミュユダグラスが到着する。

2. ポット苗の作成 (H21.5.7~5.23)

切り芝をカマやはさみを使って幅約10cmにカットし、



それを手でちぎりながら、ポットに植え切り芝をポットに植え、ポット苗を作成する。

ポット苗作り

H21.5.7

3. ポット苗の養生 (H21.5.23~6.28)

作成したポット苗への散水、に水撒きをし、養生する。この「ポット苗への散水」に入した「スプリングクローラー」を活用した。



4. ポット苗のグラウンド移植 (H21.7.6,7)

養生したポット苗をラグビー部、男女サッカー部の部員にポット苗用穴掘り機で移植する。移植方法は鳥取方式でポット苗をグラウンドに移植す



ポット苗用穴掘り機
2008.07.25



る方法で行った。7月6・7日の放課後16:30から2時間ずつ行った。

5. 芝生の養生・水撒き (H21.7.8~8.31)

ラグビー部、男女サッカー部で分担をし、グラウンドに水撒きを行う。その期間のクラブ活動については、グラウンドをメインで使用するクラブ（男女サッカー部、ラグビー部）については、学外の施設を利用したり、グラウンド外での練習を行ったり、各クラブに協力を依頼した。

水撒きについては、1日2回行い、各クラブ交代で行った。当番表作成にあたっては、8月、9月ともにクラブの都合を確認し、調整しながら行った。

また水撒きの方法は昨年と同様に散水機とライザー管付スプレーガンを使用した。



6. 第1回芝生会議 (H21.8.31)

グラウンド使用に向け、使用の注意、メンテナンス方法を男女サッカー部、ラグビー部で話し合う。今までは代表者

のみの話し合いだったが、男女サッカー部、ラグビー部のすべての部員に話し合いの参加をお願いした。その結果、計 50 名以上の人が参加してくれ、有意義な話し合いをすることができた。

7. ラグビー部グラウンド使用開始 (H21.9.1~)

8. 男女サッカー部グラウンド使用開始 (H21.10.1~)



9. 第2回芝生会議 (H21.10.23)

グラウンド使用の注意、メンテナンス方法の確認。グラウンドの整備用具（三輪車、散水機ホース）の修繕を学生支援課に要請。

10. 芝生化啓発フォーラム参加 (H21.10.24)

NPO 法人グリーンスポーツ鳥取代表者ニール・スミス氏、同志社大学教授鈴木直人氏の講演、パネルディスカッションの拝聴。

11. ラインカー改良 (H21.11.24)

昨年度作った水溶性インク用ラインカーをクリエの壺井先生、亀岡先生の協力のもとに改良した。昨年度製作した水溶性インクラインカーは噴霧器の噴射口から噴出されるインクの量が少なくコート作成にはかなりの時間がかかっていた。そこでクリエの壺井先生、亀岡先生の提案で噴射口を改良することで噴出するインクの量を増やすことに成功

した。



12. 和歌山県サッカーフェスティバル (H21.12.26~28)

和歌山県サッカーフェスティバルが陸上グラウンドで行われた。県内だけでなく県外からも多くの高校生が訪れ、私たちが作り上げた芝生のグラウンドで試合を行った。そこでボールがイレギュラーしない、思いっきりプレーできるなど芝生のグラウンドでサッカーをする素晴らしさを感じてもらうことができ、私たちのプロジェクトの目標である全国に芝生文化の発信ができた。



3. 結果と成果

陸上グラウンドが芝生の緑に覆われたことにより、いくつかの成果を得ることができた。まずは、正課授業の時や一般の学生が自由にグラウンドを使用している時に、寝転がったり、座って話し込む光景が目につくようになったことである。

次に、クラブ活動で使用する前に芝生会議を行ったことで、芝生の養生を意識した使い方（スタート・ダッシュ等、同じ場所を繰り返し使う練習は、フィールドの外を使う、etc.）を実践するようになった。これまでのクレー・コート（土のグラウンド）ではみられなかった「グラウンドの手入れに対する意識」に変化が見られてきたように感じられる。つまり、ただ単にグラウンド・レーキを引くという作業ではなく、水撒きや芝生がはげたとところへの土入れなど、芝生のことを少し考えてグラウンドを手入れするようになってきた。また環境保全の面でもグラウンドに芝生の根が張ったことで砂が舞うことがなくなった。砂が舞うことがなくなったので練習前にグラウンドに水を撒く必要もなくなるなどの成果がみられている。

現在は気温が下がり、芝生が育ちにくくなり、グラウンドのよく使用される部分がはげてきている。しかし、昨年度に比べはげている部分は少なくなり、はげていない部分は芝生の密度が濃くなってきている。また昨年度に種をまいた冬芝が11月になり、芽を出し始めるなど、昨年度の活動が今年度

にも成果を表した。このことから1年を通しての陸上グラウンドのフィールド部分の芝生化するためには1年だけの努力だけでなく、何年も継続して努力をしていくことが重要であることを示している。

また和歌山県サッカーフェスティバルや各部活の練習試合、wadaï クラブのスポーツフェスタなど多くの外部の人が芝生である陸上競技場を利用した。このことから私たちのプロジェクトの目的である日本に馴染みのない芝生文化を和歌山県だけでなく全国に発信することができた。

4. 今後の展開

陸上グラウンド緑化事業は今年で2年目であったが、今年度の活動では昨年度に比べはげている部分は少なくなり、はげていない部分は芝生の密度が濃くなってきていることや、昨年度に種をまいた冬芝が芽を出し始めるなど、1年を通してグラウンドの全面芝生化をいじするためには、何年も継続して努力をしていくことが重要であることがわかった。この経験を生かし来年度もこのプロジェクトを続けていきたい。

今後の課題は芝生がはげている部分をなくすことである。そのために芝生のはげやすい寒い時期の対策を考えなければならない。

文 献

- [1] NPO 法人グリーンスポーツ鳥取 <http://www.greensportstottori.org/>
- [2] 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>



